

古今和歌集雜歌上卷末屏風関連歌について

佐田 公子

一 はじめに

古今和歌集雜歌上は「よろこび」⁽¹⁾（恩恵・慈愛・昇叙祝賀・参詣・節会・享楽）の歌群の次に月・老・水の歌群がそれぞれ続き、巻末三首が屏風関連の歌で終わっている。筆者は古今和歌集雜歌の構成要因を些か探究してきたが、本稿では、この巻末三首の屏風関連歌の意義を確認しておきたい。⁽²⁾

当該歌三首は次のような歌である。⁽³⁾

田村御時に、女房の侍にて、御屏風の絵御覧じけるに、滝落ちたりける所面白し、これを題にて歌よめと、侍ふ人に仰せられければ、よめる

思おもせく心の内の滝なれや落つとは見れどをとのきこえぬ

屏風の絵なる花を、よめる

咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の絵に、よみ合わせて、書きける

刈りてほす山田の稲のこきたれて鳴きこそわたれ秋のうければ

各歌は古今集における屏風絵を題にした歌及び屏風歌の方向から従来より検討されてきているが、雑歌の観点からはその雑糅性を如実に示す歌として受け取られがちであった。確かに「よろこび」の歌群から月・

老・水の歌群が展開された後に、屏風関連歌が置かれていることには唐突の感を免れない。しかし、前稿で確認した月・老・水の歌群配列の基盤となった再生・復活・不死の思想を考えた場合、屏風関連歌が巻末に位置する必然性も自ら納得され得るであろう。そしてそれは、絵画と文学を通しての芸術の永遠性への希求であり、また一般に現世の無常観を詠じたと言われる下巻巻頭歌との対比の上から配されていることも確認できる。本稿はこの点について言及を試みたい。

二 屏風関連歌が雑部に入集された要因

まず、雑部に屏風関連歌が入集せられた要因について考えてみよう。古今集中には詞書から屏風絵を題にした歌と判断できる歌は、930・931番歌以外に四首（秋下293素性、294葉平、305躬恒、賀351興風）あり、屏風に書きつけた屏風歌は932番歌以外に十首（賀352貫之、353・354・357素性、358躬恒、359友則、360躬恒、361忠岑、362是則、363貫之）ある。したがって雑歌に集められた屏風関連歌は結局各部立に配属できなかった残りの歌という消極的理由から捉えることもできる。

しかし一方、先行勅撰漢詩集に目を向けると、唐絵屏風の題画詩として注目される「経国集」の「青山歌」「清凉殿画壁山水歌」は「雑詠」に収められていた。また、蔵中のぶ氏がこの「経国集」の題画詩の嚆矢として位置づけられたところの「文華秀麗集」巻下の「冷然院各賦」

一物、得三潤底影」曝布水 水中影」も「雜詠」に収められている。それらのことを考えると、こうした勅撰漢詩集の先例から、古今集雜の部に屏風関連歌を入集することには抵抗がなかったものと思われる。また、三条の町の930番歌に限ってみても、諸氏が指摘するように「経国集」「清涼殿画壁山水歌」の「嶺上流泉聴無響。潺湲石落溪隈」を踏まえ、実物と画の相違を自身的心情と合わせて詠んだ先駆的表現をもつ歌であるから、他部立に分類不可能なこの歌が雜歌に入集されてくるのは当然であつたと言えよう。否、むしろ、撰者達が勅撰漢詩集の先例を考慮し、唐絵に対する大和絵、題画詩に対する屏風絵題の歌及び屏風歌の生成の歴史を意識した場合、初の勅撰和歌集の雜部には是非とも構成すべき歌群だつたとも言えそうである。

三 滝の歌群から930番歌への連続相の意味

ところで、このような唐絵・漢詩に拮抗しようとする意識は、雜歌の屏風関連歌が滝の歌群（水の歌群910～929番歌のうち922番歌以降が滝の歌群）の直後に置かれていることにも示されていると言える。宮中や貴族邸の日常的調度品として用いられた古今集前夜に当たる十世紀初頭までの唐絵山水屏風の中には瀑布図が多数組み込まれていたことは容易に想像される。そうした唐絵山水図は漢風賛美時代から道真・長谷雄に至るまでの漢詩世界の老壮神仙思想への情調的傾向と相俟って享受されたことも言うまでもない。一方、実景としての瀑布も神泉苑・冷然院行幸における漢詩中に詠ぜられたり、時には「経国集」巻十、公主の楽府「五言。奉和巫山高一首」や梵門、嵯峨帝の「七言。和良將軍題瀑布下蘭若簡清大夫之作」のごとく詠まれるほか、雲林院行幸における道真の「行幸後朝、憶雲林院勝趣、戲呈吏部紀侍郎」(官家文章

卷六¹²)や「観曝布水(官家文章卷三¹³)」のごとく、遊覧・御幸の際に詠まれている。これに対し和歌においては、深山悠久たる瀑布見学そのものを目的とした遊覧として行平・業平の布引の滝(922・923)の詠歌があり、これは伊勢物語78段にも組み込まれ、古今集雜歌の滝の歌群の冒頭に据えられている。また承均法師の吉野の滝(924)・神退法師の清滝(925)・伊勢の竜門(926)・忠岑や躬恒の音羽の滝(928・929)など古今集雜歌上の滝の歌群は、漢詩世界からヒントを得た様々な見立てを生み出した和歌を配列して、唐絵漢詩の神仙的世界から和歌による和風化の妙を表したと言えよう。

このように滝の歌群は、漢詩から和歌文学生成への歴史的過程を少なからず意識して編まれたものと思われる。そして、これまた唐絵山水屏風から大和絵山水屏風への過渡期に当たる文徳朝における、しかも瀑布図を題とした930番歌を滝の歌群の次に置いたことも、そのような和歌文学の生成の過程を屏風関連歌において認識した上で行ったものであつたと言ふことができる。

四 930・931番歌——絵画の恒常性

先述したように930番歌のモチーフの基盤は、「経国集」「清涼殿画壁山水歌」嵯峨御製中の「嶺上流泉聴無響」で、昔の嵯峨帝ならぬ文徳帝の題詠を求める趣向に和するがごとく実物と画の相違を自身的心情に取り入れたものであつた。また、931番歌も岩波新古典文学大系の脚注にある「清涼殿画壁山水歌」の嵯峨御製「画勝真花笑冬春。四時常悦世間人」や渡辺秀夫氏が指摘されるように菅原清公の「雑花冬不殫、積雪夏猶残(奉和清涼殿画壁山水歌)」を踏まえて絵画の不変性が詠まれており、930・931番歌の配列自体も「清涼殿画壁山水歌」の典拠部分

の順序に則っていることに注意される。

931番歌はもとより春部には分類できない歌である。貫之集でも巻九の巻頭に収められているが、このことは逆にこの歌が絵画の永遠性・不変性を讃えた歌として捉えられ、屏風歌作家としての貫之の面目躍如たる歌として高く評価されたことを意味しているのではあるまいか。

ところで、このような実物と絵画の相違や絵画の永遠性・不変性への着眼は、「清涼殿画壁山水画」の典拠が示すようにもとより漢詩世界の産物であつた。安藤太郎氏は、中国初期の題画詩の中では杜甫の詩などに絵と実物の相違に詩境を求めるものがあるとされ、本朝では先の「清涼殿画壁山水画」の他に、これに和して奉った菅原清公・都腹赤の

繞棟輕雲未出、窺窓狎鳥終年止 (清公)

玄鶴雲中飛不去、白鷗水上猶竝 (腹赤)

羽客吹笙無韻調、幽人傾爵未曾醺 (腹赤)

人間気序幾回転、壁上風光無明年 (腹赤)

や「田氏家集」「秋日諸客会飲、賦屏風一物得舟」の中の「風吹三鶴首惟帆留」をあげ、画の中の事物の不変性を実際と比較している例としていられる。また、小西基一氏が指摘され、竹岡正夫氏全評釈や渡辺秀夫氏が引かれるように、「文鏡秘府論」の「屏風詩曰、緑葉霜中夏、紅花雪裏春、去馬不移动、来車豈動輪。唐吳融画山水歌云、経年胡蝶飛不去、累歲桃花結不成。」や「官家文章」第五「屏風詩云、人馬無来去、煙霞不始終。」なども絵画の不変性をいつたものとして挙げられる。

930・931番歌は明らかにこれら漢詩の影響を受けて詠まれたものであり、詠歌内容からして四季や賀部に収まりきれない屏風関係歌だつたから雑歌に組み込まれたものと言える。しかし、単にそれだけの理由で絵

画の恒常性を表した歌が雑歌巻末歌群に据えられたのではなかったようである。

五 月・老・水の歌群と絵画芸術論と

ここで注目したいのは、こうした絵画の恒常性・不変性は、月・老・水の歌群配列のバックに流れる再生・復活・不死の理念に少なからず通じているということである。滝の歌群の末尾の音羽の滝を詠んだ躬恒の歌に

風ふけどところも去らぬ白雲は世をへて落つる水にてありける (929)

というのがあがるが、この歌は風が吹いても不動の滝を白雲に見立てつつ、不変なる音羽の滝の水流を詠んだもので、再生・復活・不死を暗示する月・老・水の歌群配列の最後の歌として誠に相応しい歌であると言える。実景の滝を視覚から捉えたのがこの929番歌であるのに対し、930番歌は実景を視覚によつて描写した絵画世界の滝を聴覚にまで敷衍して、音という絵画の恒常性を言い、931番歌の画中の花の不変性を導くことになる。

このように再生・復活・不死から不変へと理念レベルでの連続相と具体的な歌語レベルとが相俟って展開されていくのであるが、それにしても雑歌巻末歌群に絵画の永遠性を文学で掬い取つたような歌を置いたのは何故なのだろうか。雑歌に残つてきた屏風関連歌が、たまたまそのような趣向をもつた歌だつたという単なる偶然からであつたのだろうか。否、そもそも漢詩においてもそうした趣向が詠まれていたのは、絵画と文学との交流の中にあつていかなる意味をもっていたのだろうか。文学には「詩経」をはじめとした文学論があるように、絵画にもその効用や

芸術的価値を論じた絵画論なるものがあり、勅撰集を編む場合にもある程度それが作用していたとは考えられないだろう。

当時絵画論なるものがどのくらい意識されていたかは、『日本国見在書目録』にもそれらしき書名が見当たらないので何とも言えない。しかし、唐の張彦遠の『歴代名画記』十巻は有力であると言える。成立年は不明だが、長慶元年（821）頃、張彦遠が未だ幼少だったという記録があるので、『歴代名画記』も九世紀後半には成立していたと思われる。その巻一「画の源流を叙ぶ」の冒頭には¹⁷

夫れ画なるものは、教化を成し、人倫を助け、神変を窮め、幽微を測り、六籍と功を同じくし、四時と並び運る。天然を発す、述作に繇るに非ず。

と絵画芸術に対する基本的思想を打ち出している。これは真名序の「動天地。感鬼神。化人倫。」にも通じる理念であると言える。また「図画なるものは有国の鴻宝・理乱の紀剛なり（図画は君主の至宝、治乱の根本である）」とあり、唐の憲宗の言として

朕は朝を視る余を以て、以てて寓目するを得たり。因て知る、丹青の妙は造化の功に合するもの有るを。（朕は、政務終わりし後、これらを眺める余暇を得て、それをよすがに、絵画のすばらしさは造化の功用にも等しい働きが内在することを悟るであろう。画上の形象を観察して自省せんとするのであれば、いかで好奇の心も骨董趣味に耽るうぞ。）

と天子自らが絵画の効用を讃えている。さらに山水については

嘗て自ら「画山水序」を為りて曰く、「聖人は道を含み物を映す。賢者は懷を澄ませて像を味わう。山水に至りては質は有、趣は盡なり。（中略）それ聖人は神を以て道に法い、而して賢者は通ず。山

水は形を以てて道に媚び、而して仁者は楽しむ。また幾からずや（かつて自ら「山水を画くの序」を作つて次のごとくいう。「聖人は道を身につけて外物を照らし、賢人は心を澄ませて万象を賞味するが、山水の場合それは形而下の存在であるが、靈妙な精神性をそなえている。〈中略〉いったい聖人は靈妙な精神によって、道を規範化して、賢人がその法則を明らかにするが、山水は具体的な形で以てて、道を芸術化すると、仁者がその美を楽しんでゆくのだから。これこそ理想的といつていいのではないか。）」

と山水画の理念を述べている。

『歴代名画記』が当時渡来し、読まれていたという確証はない。しかしこの書に限らずこうした絵画芸術論が多数の唐絵山水画とともに輸入されてきたであろうことは容易に想像できる。まして絵画の国家的意義は、士大夫の前に提示された文学とともに勅撰集たる古今集において重要な意味を持っていたのではないかと思われる。いやこうした意識があればこそ、月・老・水の歌群配列の底流に普遍なるものへの希求という思想を醸し出した後に絵画の恒常性・不変性を讃えた歌を据えて、今、正に発展しつつある大和絵屏風及び屏風歌の世界を先取りして雑歌上巻末に歌群として設定したと考えられてくるのである。

六 巻末92番歌の意義

さて、930・931番歌が屏風絵を題にした歌であるのに対し、實際屏風に書きつけた所謂屏風歌である巻末の92番歌の意義を考えてみなければならない。931番歌は人の心を春の喜びに満たす画中の花の恒常性とその効用を詠った祝儀的な和歌であるが、92番歌は秋の憂愁を詠んだ歌で、この二首が対比的な構成になっていることはすぐに分かる。

じ、さらに下巻巻頭の現世の無常との対比の上においても、かなり意識的に構成されたものであったと考えられるのである。

〔注〕

- 1 岩波新古典文学大系『古今和歌集』の脚注による。
- 2 拙稿「古今和歌集の雑歌「老」の歌群をめぐって」（国文目白17号・昭53・2）、「雑」の特色と構造」（二冊の講座、古今和歌集」所収 昭和62・3）、「古今和歌集雑歌上 月・老・水の歌群配列をめぐって」（『叢書』創刊号 平7・4）など。
- 3 岩波新古典文学大系『古今和歌集』による。
- 4 松田武夫氏「古今和歌集の構造に関する研究」では、この屏風関連歌群を水の歌群の中に一括してしまっている。これに対し、菊地靖彦氏（『古今集』雑歌論）「講座平安文学論究 2」（昭60所収）は、松田説を批判し、「雑歌」という部立そのものが元来雑纂であるとするならば、屏風関連歌三首は水の歌群に入れる必要はないとされる。
- 5 「古今和歌集雑歌上、月・老・水の歌群配列をめぐって」『叢書』創刊号 平7・4
- 6 小島憲之氏（『上代日本文学与中国文学 下』昭40 塙書房）は「この「清涼殿壁画山水歌」は、中国文学的空想を描きながら、この山水壁画を鑑賞した風がみられ、この絵画と文学との交流は、唐詩人の模倣とは云へ、そこにわが絵画史の上に及ぼした詩文学の大きな役割が考へられる」と言われる。
- 7 「題画詩の発生——嵯峨天皇正倉院御物屏風沽却と「天台山」の文学」『国語と国文学 昭63・12

以上のように一見雑歌の雑纂性を示しているかに見える屏風関連歌群は、漢詩に拮抗した和歌文学の生成を認識した上で配されていると言える。そしてその理念は絵画の不変性・恒常性・永遠性といった芸術への希求において、再生・復活・不死を暗示する月・老・水の歌群に相通

- 8 渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』平3・岩波新古典文学大系『古今和歌集』の脚注。
- 9 秋山光知『本朝世俗画の研究』では、文徳朝の330番歌の滝の絵は、日本の風景として描かれていたのではないかとされる。いずれにしても、唐絵のなごりのある絵であろう。
- 10 巫山高且峻。瞻望幾岩々。積翠臨蒼海。飛泉落紫霄。陰雲朝曉暖。宿雨夕飄飄。別有曉猿叫。寒聲古木條。
- 11 瀑布一辺寺。高車訪道遠追尋。空堂望崖銀河発。古殿看溪白虹臨。
- 12 ……青苔地有心中色 瀑布泉遺耳下聲 猶恨春遊無御製 僧房筆硯旧煙生
- 13 「銀河倒瀉落長空 恰似霜紉颺晚風 清濺寒声咽不得 将聞二十八言中」の、点部分（滝の落下する清い寒げなひびきは、図画に描き写すことはできない）に見るように道真によっても瀑布図と音の関係が捉えられている。
- 14 注8 渡辺氏前掲書の「古今集歌にみる漢詩文的表現」に詳しい。
- 15 安藤太郎氏「題画詩と屏風歌——平安初期の屏風歌の一考察——」東京成徳短期大学紀要 昭53・4
- 16 小西甚一氏「古今集の表現の成立」日本文学研究資料叢書『古今和歌集』
- 17 平凡社東洋文庫『歴代名画記』1・2長廣敏雄氏訳注による。
- 18 竹岡正夫氏『古今和歌集全評釈』による。
- 19 高野晴代氏「大和絵屏風と歌材の開拓」国文学 平7・8